

# 古千屋

芥川龍之介

青空文庫



樫井かしいの戦いのあつたのは元和元年げんながねん四月二十九日だつた。大阪勢おおさかせいの中でも名を知られた塙団右衛門直之はんだんえもんなおゆき、淡輪六郎兵衛重政たんなわろくろうびようえしげまさ等はいずれもこの戦いのために打ち死した。殊に塙団右衛門直之は金の御幣の指し物きんごへいものに十文字の槍じゅうもんじやりをふりかざし、槍の柄つかの折れるまで戦つた後のち、樫井の町の中に打ち死した。

四月三十日の未の刻ひつじこく、彼等の軍勢を打ち破つた浅野但馬守長晟あさのたじまのかみながあきらは大御所徳川家康おおごしょとくがわいえやすに戦いの勝利を報じた上、直之の首を献けんじよう上じようらくした。(家康は四月十七日以来、二条の城にとどまつていた。それは將軍秀忠ひでただの江戸から上洛するのを待つた後のち、大阪の城をせめるためだつた。)この使に立つたのは長晟の家来けらい、関宗兵衛せきそうべえ、寺川左馬助てらかわさまのすけの二人だつた。

家康は本多佐渡守正純ほんださどのかみまさずみに命じ、直之の首を実検しようとした。正純は次ぎの間に退いて静に首桶くびおけの蓋ふたをとり、直之の首を内見した。それから蓋の上に卍まんじを書き、さらにまた矢の根を伏せた後のち、こう家康に返事をした。

「直之なおゆきの首は暑中の折から、頬ほおたれ首くびになっております。従つて臭気も甚だしゆうござ  
いますゆえ、御検分ごけんぶんはいかがでございませうか？」

しかし家康は承知しなかつた。

「誰も死んだ上は変りはない。とにかくこれへ持つて参るようにな。」

正純まさずみはまた次ぎの間へ退き、母布ほろをかけた首桶を前にいつまでもじつと坐つていた。

「早うせぬか。」

家康は次ぎの間へ声をかけた。遠州えんしゅう横須賀よこすかの徒士かちのものだつた塙団右衛門直之しんぢはい

つか天下に名を知られた物師ものしの一人に数えられていた。のみならず家康の妾しやうまんお万かたの方も彼

女の生んだ頼宣よりのぶのために一時は彼に年ごとに二百兩の金を合ごうりよく力ちからしていた。最後に直

之は武芸のほかにも大竜だいらゆう和尚おしょうの会下えかに参じて一字不立いちじぶりゆうの道を修めていた。家康のこ

ういう直之の首を実検したいと思つたのも必ずしも偶然ではないのだつた。……

しかし正純は返事をせず、やはり次ぎの間に控ひかえていた。成瀬隼人なるせはいとのしやうまきなり正正成かたや土どいお

井大炊頭利勝おいのかみとしかつへ問わず語りに話しかけた。

「とかく人と申すものは年をとるに従つて情じやうばかり剛こわくなるものと聞いております。大おおい

御所しよほどの弓取もやはりこれだけは下々しもしものものと少しもお変りなさりませぬ。正純も

弓矢の故実だけは聊かわきまえたつもりでおります。直之の首は一つ首でもあり、目を見開いておればこそ、御実検をお断り申し上げました。それを強いてお目通りへ持つて参れど御意なざるのはその好い証拠ではございませぬか？」

家康は花鳥の襖越しに正純の言葉を聞いた後、もちろん二度と直之の首を実検しようとは言わなかつた。

## 二

すると同じ三十日の夜、井伊掃部頭直孝の陣屋に召し使いになつていた女が一人俄に氣の狂つたように叫び出した。彼女はやつと三十を越した、古千屋という名の女だつた。

「塙団右衛門ほどの侍の首も大御所の実検には具えおらぬか？ 某も一手の大將だつたものを。こういう辱しめを受けた上は必ず祟りをせずにはおかぬぞ。……」

古千屋はつづけさまに叫びながら、その度に空中へ踊り上ろうとした。それはまた左右の男女たちの力もほとんど抑えることの出来ないものだつた。凄じい古千屋の叫び声はもちろん、彼等の彼女を引据えようとする騒ぎも一かたならないのに違いなかつた。

井伊の陣屋の騒がしいことはおのずから徳川家康の耳にもはいらない訣には行かなかつた。のみならず直孝は家康に謁し、古千屋に直之の悪霊の乗り移つたために誰も皆恐れていることを話した。

「直之の怨むのも不思議はない。では早速実検しよう。」

家康は大蟬燭の光の中にこうきつぱり言葉を下した。

夜ふけの二三条の城の居間に直之の首を実検するのは昼間よりも反つてもものしかつた。家康は茶色の羽織を着、下括りの袴をつけたまま、式通りに直之の首を実検した。そのまた首の左右には具足をつけた旗本が二人いずれも太刀の柄に手をかけ、家康の実検する間はじつと首へ目を注いでいた。直之の首は頬たれ首ではなかつた。が、赤銅色を帯びた上、本多正純のいつたように大きい両眼を見開いていた。

「これで塙団右衛門も定めし本望でございましょう。」

旗本の一人、——横田甚右衛門はこう言つて家康に一礼した。

しかし家康は頷いたぎり、何ともこの言葉に答えなかつた。のみならず直孝を呼び寄せると、彼の耳へ口をつけるようにし、「その女の素姓だけは検べておけよ」と小声に彼に命令した。

家康の実検をすました話はもちろん井伊の陣屋にも伝わって来ずにはいなかった。古千屋はこの話を耳にすると、「本望、本望」と声をあげ、しばらく微笑を浮かべていた。それからいかにも疲れはてたように深い眠りに沈んで行った。井伊の陣屋の男女たちはやつと安堵の思いをした。実際古千屋の男のように太い声に罵り立てるのは気味の悪いものだったのに違いなかった。

そのうちに夜は明けて行った。直孝は早速古千屋を召し、彼女の素姓を尋ねて見ることにした。彼女はこういう陣屋にいるには余りにか細い女だった。殊に肩の落ちているのはもの哀れよりもむしろ痛々しかった。

「そちはどこで産れたな？」

「芸州 広島の御城下でございます。」

直孝はじつと古千屋を見つめ、こういう問答を重ねた後、徐に最後の問を下した。「そちは塙のゆかりのものであろうな？」

古千屋ははつとしたらしかつた。が、ちよつとためらつた後、存外はつきり返事をした。

「はい。お羞しゆうございますが……」

直之は古千屋の話によれば、彼女に子を一人人生ませていた。

「そのせいでございましょうか、昨夜も御実検下さらぬと聞き、女ながらも無念に存じますと、いつか正気を失いましたと見え、何やら口走つたように承わっております。もとよりわたくしの一存には覚えのないことばかりでございしますが。……」

古千屋は両手をついたまま、明かに興奮しているらしかつた。それはまた彼女のやつれた姿にちようど朝日に輝いている薄ら氷に近いものを与えていた。

「善い。善い。もう下つて休息せい。」

直孝は古千屋を退けた後、もう一度家康の目通りへ出、一々彼女の身の上を話した。

「やはり塙団右衛門にゆかりのあるものでございました。」

家康は初めて微笑した。人生は彼には東海道の地図のように明かだつた。家康は古千屋の狂乱の中にもいつか人生の彼に教えた、何ごとにも表裏のあるという事実を感じない訣には行かなかつた。この推測は今度も七十歳を越した彼の経験に合していた。……

「さもあろう。」

「あの女はいかがいたしましたでしょうか？」

「善よいわ、やはり召使めいしつておけ。」

直孝はやや苛いらだ立たしげだった。

「けれども上かみを欺あざむきました罪は……」

家康はしばらくだまつていた。が、彼の心の目は人生の底にある闇黒あんこくに——そのまた闇黒あんこくの中にいるいろいろの怪物に向っていた。

「わたくしの一存いちぞんにとり計はからいましても、よろしいものでございましょうか？」

「うむ、上を欺いた……」

それは実際直孝には疑う余地などのないことだった。しかし家康はいつの間まにか人一倍大きい目をしたまま、何か敵勢にでも向い合ったようにこう堂々と返事をした。——

「いや、おれは欺あざむかれはせぬ。」

(昭和二年五月七日)



## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年2月3日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 古千屋

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>